

鹿子木孟郎《教会》

鹿子木孟郎はその生涯に三度フランスに留学している。1901(明治34)年には、ボストンとワシントン経由で初めてパリに渡った。第2回留学は、1906(明治39)年で住友家の援助で実現した。第3回留学は、1916(大正5)年。京都の実業家・松風喜定の援助によるものである。3度の留学で鹿子木は何度もアカデミー・ジュリアンに学び、フランス最後の歴史画家といわれたローランスから重厚なレアリズムを教授されている。この「教会」は第3回留学時代に描かれたものだが、鹿子木が少なくとも風景画に関しては、外光主義的な明るい色彩を用いて取り組んだ事実を裏付ける作品となっている。



パリを訪れたことのある人ならだれでも、この風景を思い出すことがあるだろう。サンルイ島のアンジュ河岸である。荻須高德がパリを訪れたのは、26歳の年、1927(昭和2)年の秋である。彼はまず、すでに



荻須高德《アンジュ河岸・パリ》

パリで制作を続けていた佐伯祐三を訪れ、ルーブル美術館などを見学している。荻須が佐伯祐三の死を知るのは、彼がブルターニュを旅行していた時である。荻須は遺骨を抱きながら帰国の途につく夫人をマルセイユ港に見送っている。荻須高德の風景画は、佐伯祐三の愛したパリの街路をモチーフにしながらも、荻須独特の端正な筆致で描かれ、明るく風通しのよい作品に仕上げられている。